

東郷村報

第94号

昭和34年9月17日

発行所

宮崎県東臼杵郡

東郷村役場

日向市富高

安藤印刷所

電話 64番



牧水祭記念号

牧水祭を迎えて

牧水顕彰会長 黒木松美

日本文学アルバムに牧水先生について次のように記されています。

「若山牧水氏にあつては、寂寥を寂寥とする純一無垢な心が、また、それゆゑの飄逸なあそび心が、歌にも旅にも酒にも貫通して心を通うたれる。今日では、この型の詩人は少ない。しかも、自分を確かめるための歌、旅、酒となつてゐるところに、現代人の屈折の多い心魂にふれるものがある。その四十四才の生涯に遺した六千八百九十六首の短歌には、まことに歌として朗誦すべき格調の高い絶唱が多い。およそ酒を愛するほどの人に愛唱されてゐる讃酒歌のいくつもある。更に短歌以外に

すぐれた紀行文があり、短歌に劣らないくらいに読者ももつてゐる。」

牧水先生

—日本文学アルバムによる—

幼年時代の牧水は、四季を通じて山や林に親しみ、水泳や釣りを好んで、やがて少しずつ文学を知るようになる。少年雑誌や姉たちの読み古したものをふり仮名を辿つて読んだ。十一才の時に初めて小説といふものを手にした。報知新聞に連載されていた村井弦斎作「朝日楼」で胸を躍らせて読み耽つたと「おもいで」の記に記してある。

明治二十九年三月、村の尋常小学校を首席で卒業すると、父母の膝下を離れて延岡町に出て、延岡高等学校に入學した。

延岡高等学校での担任教師日吉昇は、土地随一の文章家として知られた人で、牧水の才を愛し育成に力を尽した。明治三十二年三月に第三学年修業。この年の春、県立延岡中学校が開校され、牧水は百名中第四番の成績で入學し、二組中一方の副組長を命ぜられた。同時に寄宿舎明徳寮に入り、寮では毎月一回茶話会を開催する例としたが、第一回の時に紀行文を朗読して非常な好評を博した。学業のうちは国語や作文が特に優秀だった。校長は山崎庚午太郎とよむ史学専攻の人であつて、牧水は自らは西洋の偉人の名などを口にし、一面また詩藻も豊かで西行を説き香川景樹を説くといふふうで、牧水はこの人に心酔してこの人も亦牧水の才を愛していた。

二年の頃から文学書に親しむようになり、馬琴の八犬伝を求めて耽読したのもこの頃であつた。当時生徒は小説類を読むことを厳禁されていたが、外出先から携えてきては、ひそかに耽読していた。また撃剣の試合中に横面を打たれた鼓膜が破り、そのため晩年まで左の耳に多少の不自由を感じた。この頃には二年生の時であつたらしい。

三年生に進んだ牧水は、明徳寮を出て同級の友人大いたに刺されて同紙に投書したりした。

坪谷 白雨楼 海に及びて帰る松原末遠く青葉若葉に白雨のふる天のしぎのぎのぎの青葉山青葉に白しすの滝白鳩の鎮守の森に啼きたちて青葉幾重の明方の雨清水湧く山路なかばの松かげに荷馬車の旗のひるがへる見ゆ

「日州独立新聞」掲載の五年生の時選挙で校友会の雑誌部長に推され、部の運営の上でも才能を発揮した。

この年の九月から英文科本科生となつた。翌年春あたりから同級生六名と共に「北斗会」を結んで小説研究をし、やがて回覧雑誌「北斗」を出しはじめた。

